

博士課程教育リーディングプログラム 平成29年度プログラム実施状況報告書

採択年度	平成25年度		
機関名	名古屋大学	全体責任者（学長）	松尾 清一
類型	複合領域型（情報）	プログラム責任者	松下 裕秀
整理番号	R02	プログラムコーディネーター	武田 一哉
プログラム名称	実世界データ循環学リーダー人材養成プログラム		

＜プログラム進捗状況概要＞

1. プログラムの目的・大学の改革構想

本プログラムでは、情報科学・工学・医学系・経済の4研究科に跨る、機械・人間・社会を対象にした、「データ取得の学理」と「データ解析の数理手法」を体系的に学ぶとともに、「多くのケーススタディ」を行うことで「実世界データ循環」を俯瞰する力を養う。さらに、豊富な海外経験や産業現場の経験を通して、この俯瞰力を確固たるものにしつつ、実世界データ循環による社会的価値創造に寄与しうる博士論文研究を行うことで、「実世界データ循環」を構築する力を得る。このようなプログラムを高い意欲と学力を持った学生に対して実施することで、産業界における将来のリーダー候補を養成する。

研究科に跨る学域において、学位プログラムを柔軟に（複数専攻教員の協働、外国人特任教員の雇用、国外からのプログラム参加）設立することを可能にする改革を行い、グローバル社会（採用側、入学側）のニーズに応え得る（top 100を確固たるものにする）教育研究組織を目指す。

2. プログラムの進捗状況

(1) リーダーを養成する学位プログラムの確立に関しては、学内6リーディングプログラムが実施する共通科目（英語教育等）を、相互受講を実施し効率的な教育を推進するための整理を進めた。また、カリキュラムに関しては、POコメント、学外評価、社会人メンターからのアドバイスや履修生の意見を参考に、講義時間や演習形式などの実施方法を改善している。例えば、産業現場体験と国際現場体験を通じて経験的な知識を獲得する実世界ワークでは「フォローアップビジット」と「産学官プロジェクトワーク」では、学生の履修状況や学内外の教員及びメンターの意見を勘案したうえで実施要項を確定し実施した。また、全履修生に学内外1人ずつのシニアメンターを配置するとともに、D1次履修生に研究室ローテーションを体験させることにより、専門分野の枠を超えた研究指導を実践した。また、履修生専用スペースを活用した各種ミーティングの実施、及び、異分野履修生提案による共同研究プロジェクトの実施（平成29年度は3件）により、履修生が切磋琢磨する活動を行わせた。また、4研究科長会議を実施し、文部

科学省による経済的支援終了後の教育体制の維持等、履修生が安心して継続できるための提言を行った。

- (2) 産学官民参画によるグローバルリーダーとして成長及び活躍できる体制確立のため、各学生別に学内外のプログラム教員を配置し指導いただく学内外シニアメンター制度及び社会人メンター制度を継続して導入し、月1回全履修生が集まるプレナリーミーティングにおいて、指導いただく機会を設ける（延べ60人）とともに、産学官民の観点からのプログラム改善についての議論にも参加いただき、学生による各種実施報告時の評価項目に対応した形でのプレゼンテーション指導の徹底などの改善がなされた。
- (3) グローバルに活躍するリーダーを養成する指導体制の確立に関しては、外国人を含む特任教員を継続雇用するとともに、海外での語学研修（フィリピン）、サマースクール（タイ）の企画運営を行う等により、英語でのディスカッション及びプレゼンテーション能力の向上がみられた。
- (4) 優秀な学生の獲得に関しては、学内での説明会、年2回発行のNews Letterやプログラム活動を伝えるホームページ「循環ストリーム」を通じた活動紹介等により、学生獲得活動を実施した。その結果、平成29年4月より、23名の志願者から学生12名の四期生（外国人6：日本人6、情報4：工学6：医学1：経済学1、男性9：女性3）及び二期三年次編入生2名（外国人1：日本人1、経済学2、男性1：女性1）の計14名を受入れた。また、平成30年度より入学予定の選抜試験では、15名の志願者から学生5名の五期生（外国人3：日本人2、情報2：工学2：経済学1、男性3：女性2）及び二期三年次編入生2名（外国人2、工学1：経済学1、男性1：女性1）を受け入れ、多様な背景を持ち入学時に求める以上の英語力(TOEIC700点相当)のある優秀な学生の獲得を実現した。
- (5) 世界に通用する質保証システムに関しては、SNSとe-Portfolioの連携システム（eアゴラ）を活用して「文書、体験、議論」などの様々な成果物に基づき、総合的な質保証を行っている。本システムの実運用を通じて発見された問題点(インタフェースやエンドース機能等)の改良により、多観点からの質保証環境の整備を進めるとともに、三期生を対象に2年間の学修状況を審査するQE1において、外国人や社会人も交えた形でのeアゴラを活用した質保証を行った。
- (6) 事業の定着・発展に関しては、学内組織「リーディング大学院推進機構本部」が主催し学内6リーディングプログラムコーディネータが参加する月1回の会議を通じて、プログラム終了後の定着・発展に関する議論がなされている。具体的には、事業終了後に関しては、教育研究組織改革を通じたプログラムの内製化を進めており、6リーディングに共通する基盤機能（博士課程教育推進機構）と、各リーディング個別の教育機能（情報学研究科附属・価値創造研究センター）の2階建てでの運用を開始した。また、同会議では、名古屋大学が幹事校となり2017年10月に名古屋で実施したリーディングフォーラム2017において、事業の定着・発展について議論を行い、全リーディングを交えた形でリーディングプログラムの出口戦略、プログラムの定着、多様性推進などの各分科会での議論を企画・運営して、ノウハウ集等の形でまとまった成果が得られた。